

ASSETS OF OUR LIVES

《確かな知識や教養を身につけ・豊かな心を育て・充実した人生を!!》

2022年10月01日 第36巻19号

※ すでに9月中旬に全生徒に配布している文書です。

【世界の識者による「ウクライナ問題の真実」の把握】

事前にお断りしておきますが、この文書を作成している志成館の館長の森は学習塾の指導者であり、学者ではありません。従ってこの文書を客観的に権威づけるものはなにもありません。また、政治家でもありませんので、特定の国家や政党や社会的勢力の利益を代表する文書でもありません。たくさんの生徒の未来を預かる一人の人間として、「今の世界の情勢で果たして私の教え子たちを含む今の子供たちは果たして幸せな未来を過ごすことができるのか」という視点と、若い頃法律家を目指して懸命に学習をして、日本国憲法や世界人権宣言のすばらしさを学び、その過程で、「人種や信条や信教や性別や社会的な身分や家柄、更には国籍や居住地域や文化の在り方などによって一切の差別がなされることがなく、なくすべての人間が、形式的な法の下での平等だけではなく、実質的な生活の諸側面でも平等に扱われ、すべての人間が幸せになることの重要性を深く認識し、それを実現することがすべての人間の責務であること」を強く意識してこの文書を作成しています。この文書を読まれた方は、内容に怒りを感じ筆者の無知厚顔さにあきれ果てられる方も多いかと思います。そのように感じられる方のために、このような私の視点の根拠となっている書籍を列挙していますので参考になさってください。

★本論★

A) 今のウクライナでの戦争は、ウクライナとロシアが戦っているように見えますが、実体はNATOの中核をなすアメリカとイギリス（NATO＝アメリカの利益獲得範囲の拡大を目指すための軍事組織）およびその配下にあるゼレンスキー政権と、NATOを東方に拡大しないという1991年当時の旧ソ連（今のロシア）の指導者であるゴルバチョフさんとの約束を反故にしてNATOを東方に拡大し、エリツィンさんという愚かで無責任な資本主義ロシアの初期に欧米諸国に国家を分断されるだけではなく、多くの国富を欧米先進国に「自由主義」という名目で奪い取られ、困窮を極めたロシアを復活させようとするプーチンさんが率いるロシアが、ウクライナという場所で戦っているとみるべきでしょう。つまり旧ソ連崩壊前の東西冷戦の対立が、今になって表立った戦いとして表れているという理解です。

B) ウクライナという場所は、世界の大国にとっては極めて重要な位置にある国になります。「アメリカ」にとっては世界全体をアメリカ中心の経済的枠組みの中に組み込むに当たっての地政学的に極めて重要な拠点であり、ロシアや中華人民共和国の勢力下に置くことが許されない場所になります。もしこの場所が中国やロシアの勢力範囲になるとロシアや中華人民共和国はEUを中心とするヨーロッパ諸国との関係も密になり、結果としてアメリカがユーラシア大陸から排除される事態が生じるからです。同時にヨーロッパとの共存を目指す「中華人民共和国」の習近平さんにとっても重要な場所になります。「一带一路」政策を採用して中華人民共和国とヨーロッパを一体化して交流を図り、お互いに繁栄しようという考えにとっても要の場所になります。さらにプーチンさんの「ロシア」にとっても旧東側諸国やEU諸国と仲よくして、原油や天然ガスを輸出して、資本主義ロシアを発展するためのかなめの場所になります。それにそもそもウクライナはかつて旧ソ連邦の一部であるという歴史的な事情があり、かつて大国であったロシアにとっての威信にかかわる場所でもあります。更にロシアのプーチンさんが参考にしておられるように見えるロシアの右翼ナショナリストのアレキサンドル・ドゥーギンさんが「地勢学の基礎」で主張されているような、旧ソ連の復活を目指す「ユーラシアニズム」にとっても大事な場所でもあります。（ちなみにプーチンさんとドゥーギンさんとは直接的なつながりはなく、影響を受けている程度であるそうです。というのもプーチン

さんはロシアの右翼ではなく、自分の国を受け入れてくれるなら欧米と協調しても良いという穏健な思想の持ち主だからです。尚、ごく最近、彼の娘のダリア・ドゥーギナさんがテロで自動車共々爆殺されましたが、私はC I Aの工作であるとみるのが素直だと思います。ウクライナにはそのような能力はないからです。) そのようなわけで、この地域はこれまでも多くの紛争があり、これからも世界的規模の大きな紛争が発生することは、当然に予測出来ると思われま

C) 森はウィリアム・ブルムさんやノーム・チョムスキーさんの本を何冊も読んでおり、自由と人権と民主主義を守るという口実で多数の国に積極的にかかわり、アメリカ合衆国の従順な指導者を擁立し、その後はアメリカの企業による搾取を放置するという、結局は自国の利益を世界中で実現してきたアメリカ合衆国、この政策は「人道的帝国主義」や「リベラル覇権主義」という言葉で表すのが適当であると私も考えているのですが、この視点からは、これまでの多くのアメリカがかかわってきた多くの世界中の紛争、そしてウクライナ地域でのオレンジ革命やマイダン革命の背景にある勢力がイギリスやアメリカの国務省=C I Aであることは容易に理解できることと思います。ロシアや中華人民共和国は悪徳国家であり、同時に世界中に日明主義国家が多数ある以上は、欧米を中心とする先進国は「他国の幸せのため」に努力をしているのであるという考えの方が欧米先進国や日本には多いと思われま

D) 事態は森の予測通りに悪い方向に向かってしまいました。エマニュエル・トッドさんも近著で「第三次世界大戦」が始まったと述べられていますが、私も今年の3月の初めの時点で「この紛争はウクライナとロシアとの戦争ではなく、世界を巻き込んだ大戦争になる」と把握していました。つまり第三次世界大戦が地球的規模で始まったという理解です。2022年の9月中旬の時点では、私の見立ては正しかったということになっています、悲しい現実ですが。

E) 今のウクライナでの戦争は、7月に中国の放送局であるCCTVで中国政府の報道官が言明していましたように、「8億人の、先進国という名で自分たちの優位性を主張し、自分たちの唱える自由や人権や社会システムが正しいと主張して今後も世界支配を目指す欧米日という国々と（これをリベラル覇権主義とか人道的帝国主義と私は把握しています）、これに対する、これまで400年以上の間、欧米に弾圧され支配され搾取されてきたBRICSを中心とする発展途上国、および戦後アメリカによる迫害を受けてきた中米や南米や東南アジアの国々の反米諸国の人々を合わせた国々の32億人との闘いが始まったのだと解すべきでしょう。

D) もちろん後者の中核をなすのは世界の共同富裕を目指す社会主義国家の中華人民共和国であり、かつての強くて大きな社会主義を復活させようとしているロシアであり、先進資本主義国家から長い間搾取され続けてきたインドでありブラジルや南アフリカ等であります。当然のことながら、先進資本主義社会による世界の秩序の維持を続けようとする欧米日先進諸国は、このような流れを許すことができません。ウクライナで始まった戦争は今後このような対立の形で続いていくと思います。

E) このような流れを考慮してみると、私は次のように考えることも可能ではないかと考えています。つまり、もし習近平さんたちが唱える「共同富裕」という理想が、本当に世界中の人民の幸せを願うものであって中国だけの富裕を目指すものではなく、それが本当に実現されるなら、世界の多くの貧しい国々は中華人民共和国を尊敬してその経済領域に入るでしょうし、大国ロシアは現在の苦しい立場から中国との関係を密にすることは明白でしょう。他方で英米のアングロ・サクソン民族やフランスやオランダやベルギーなどの諸国がこれまで数百年に及ぶ植民地支配や、グローバル経済のもとでの自由主義経済理論をもとに、自分の国や企業だけの発展や富裕化を図り、自国のこれまでの強欲な世界経済の支配と発展という名での地球環境の破壊を反省することなく、今までの在り方を続けるなら、8億人が属する先進国による世界支配は終わり、次の世界の指導国は中国になるだろうと予測しています。

F) 尚、森は経済理論ないし国家のシステム論という視点からみて、格差が広がる各国内および国家間の姿、そして

加速するばかりの地球環境破壊を目の当たりにしている現在、富と発展を求め競争を続ける「資本主義社会の理念もシステム」はこれほどまでに狭くなった地球ではもはや通用しないと考えています。地球全体で、地球上のすべての人たちが真剣に議論することによって、今の地球のシステム、経済のシステムを変えない限り、もはや人類はこの地球上に存続し続けることは不可能であると考えています。実は頭脳明晰な多くの人たちもずっと前からこのことを唱えられています。以前にノーベル経済学賞を授与されているアントニオ・ネグリさんやアマルティア・センさんたちが挙げられます。また、新自由主義理論の拡大と旧ソ連の崩壊以降は無価値であるとして退けられているマルクス経済学の復活もその例です。私がある機会で紹介したことがある「人新世の資本論」の著者であるマルクス経済学の学者の齊藤幸平さんが東京大学に招請されたのも、この流れがあるからなのです。森は九州大学の経済学部の出身で、マルクス理論についての優れた著作を多く読んであり、別紙でいろいろな著作を紹介していますので参考にしてください。

G) このようなとらえ方をした場合、今のウクライナでの闘いは、時間の面でも、規模の面でも、とても長くて大きな紛争となり、戦争ないし紛争は拡大し長引くでしょうし、お互いが消耗戦を続けるということを描きました。そうすると、経済力がないロシアやまだ軍事力が不十分な中国は、欧米先進国の軍事力や経済制裁によって滅びてしまうのでしょうか？そのような主張をする人たちが日本のメディアでも世界のメディアでも多数のように見えます。しかし欧米ないし日本では、そもそもアメリカ合衆国の移行に即した報道しかなされませんし、テレビに出る評論家もアメリカ合衆国の利益を唱える論者しかテレビには出してくれません。そんな中、私は別掲の書籍をもとに、多くの日本のメディアでの論者とは異なった見解を有しています。書籍での情報なのですが、世界一の富裕国であるアメリカには金融資本しかなく、実際にモノを作る工場も人材も自国内にはなく他国に依存しており、アメリカ合衆国のGDPには、弁護士が稼いだ訴訟費用など実際の経済力とはかかわりがないものも含まれており、「実体」としての資源や人間力はそれほどでもないという視点から、いずれは中国やロシアのグループつまり32億人のグループが勝つであろうと考えています。

H) 最近、アメリカ合衆国のナンシー・ペロシ下院議長さんが台湾を訪問し、中華人民共和国のことを「臆病ないじめっ子だ」とひどい言葉で批判されましたが、彼女は中華人民共和国とアメリカが戦争を始めるように、挑発目的で台湾を訪問されたのだと私は考えています。アメリカは自国が今後はあまり長い間世界を支配することはできないと考えて、少なからず焦っているという見方を森はしています。驚くような見解でしょうか？バイデンさんの畏にはまったプーチンさんと違って習近平さんはブチ切れて台湾を攻撃することをしませんでした。彼の腹の中には「アメリカと戦うにはまだ早い」という判断と共に、「いずれは中華人民共和国がアメリカ合衆国に勝つ」という自信があるからだとは私は把握しています。焦って台湾に攻撃を仕掛ける必要などないのです。

I) 2022年の9月の最近、プーチンさんも国際社会に対して、ヨーロッパを信じて共同発展を図ろうとしたが、経済制裁などでロシアの苦しみがわかってくれる可能性がなくなったので、今後はアジア、主に中国とインドを意識されており、同時に彼は日本も意識しておられるのですが、そちらの地域での発展を図りたいと言明されました。3~4日前にテレビで青木理さんも、日本は欧米という価値観に根差したある種のひとつのイデオロギーや国家戦略だけに頼るのではなく、ロシアや中華人民共和国など非欧米の諸国の考えにも気を配るべきであると述べられており、その番組を見られた方もいるのではないかと思います。もっとも、9月中旬にインドもモディさんと会談したプーチンさんは、モディさんから、今は戦争をする時代ではないとたしなめられておりましたが、この言葉の裏には、「戦争をしなくてもインドとロシアが手を取れば、ロシアも経済的に苦しむこともなかろうに」ということが含まれていると森は解しています。ロシアとインドは長い付き合いがあり、お互いが協力すれば欧米の制裁やNATOの拡大など気にかけることもなかろうにということだと思のですが、この部分はあくまでも森個人の、プーチンさんに同情したうえでの見解にすぎません。もちろん森IN志成館はこの推測が当たるであろうと思いつているのですが、馬鹿にされるだけかもしれません(笑)。

J) 繰り返しますが、今のウクライナでの戦争は、森は戦後の米ソの冷戦が具体的な形で現れただけではなく、まさしく資本主義を大前提とする先進諸国家群と資本主義経済を基本としながらも、理想をマルクスの資本論に求める習近平さんの中国と旧ソビエトの実現出来なかった社会主義国家を標榜する国家群と、この部分を核にして、この

大きな規模の闘いのどちらかかに加担する諸国家群を巻き込んだ闘いであり、世界中で本格的な戦争が始まったと理解しています

K) 習近平さんの中国は、マルクスからレーニンそして毛沢東から習近平さんに続く、一貫した共産主義社会の理想を目指しており、中国の唱える「共同富裕」という理想は、資本論を学んでいる森英行には本物の誇り高い主張であると感じられます。この部分に関しては、実際にも、ハーバード大学のマイケル・サンデルさんのテレビで放映されている「アメリカ人と中国人と日本人を交えた授業」の中で、中国のテレビに出ているエリート若者たちは、「あと10年あまりで中国は節目の時代になり、世界も変わって、中国は豊かになる」と確信しているように見えました。この中国のエリートである若者たちの確信は、マルクスが資本論で述べている「資本主義社会の生産構造が高度化すれば、社会主義社会に移行せざるを得ない」という理論をそのまま信じていることになるのです。繰り返しますが、私はもし人類が環境問題の解決にあくまでも本気で取り組み、ということはSDG'sなどはまよかしの政策であり、こんなことで地球環境が守れるはずはないと考えているのですが、それでももし人類が存続し続けるなら、そして世界大戦が起こらないなら、次の世界はこの様な中国の若者たちによって時代は動いていくと思っているのです。

L) 悲しいことですが、中国やプーチンさんが何を考え、どうして反米反資本主義国家群と戦おうとするのかは、マルクスの資本論を読まないとは理解出来ません。だから欧米人にとっては、プーチンさんや習近平さんは悪魔にしか見えないのです。多くの先進国の人たちは社会主義国家を「恐怖の閉鎖的で独裁的で夢も希望もない社会である」と考えておられます。しかし社会主義や共産主義は、旧ソ連や中国が考え出した思想ではありません。愛が最優先する国家である＝思いやりに溢れるフランシ人が考えた夢の世界なのです。それに理想的な社会主義社会はこれまで地球上に実現したことはありません。つまり理想的な社会主義や共産主義は旧ソ連などの姿はおおよそ社会主義とは異なった国家であるのです。ちなみに、社会主義の理想を破壊してしまったのがレーニンの率いるロシアのボルシェビキであるとして批判されていたのがイギリスのバートランド・ラッセル卿であり、ローザ・ルクセンブルグ等が属していたメンシェビキという政党(この政党の理念は現在のドイツのシュルツさんのドイツ社会民主党のルーツなのです)が支配的になっていけば世界は社会主義の理想ができるようになっていたであろうという主張もなされており、高校生時代からバートランド・ラッセルの影響を強く受けたが故に、私は共産主義者ではないと自分では考えているのですが(笑)。それでも中国の習近平さん達やプーチンさんの思想の根底には、資本主義社会が詐欺やペテンの社会であるという確信があることは理解できます。かれらを理解するためには、剰余価値論ないし搾取論、不均等発展の法則、労働価値説、疎外論、唯物史観などの、マルクスの「資本論」の考えを理解し、そして中国やロシアなどの指導者は、資本主義を否定しているのではなくアウフヘーベン(=止揚)、つまりより良い資本主義を目指しているであることを認識することが必要でしょう。この油に考えると資本主義と社会主義ないし共産主義は共存ができるのですが・・・。このようなことを言うともまた馬鹿扱いされることはいつも経験している事なのですが。

M) 最近地球環境の破壊がすさまじく、もはや経済の発展を目指す資本主義は成り立たないという視点からの、多くの書物が出版されており、穏健な形での社会主義への移行論も唱えられており、そのいくつかを別紙で紹介しています。そのような書物を参考にしなくても、豊かさを求め、必要以上の利便性や富を求め続け、今日の環境破壊をもたらした、多くの動植物を破滅させた人類が、この地球上に存続出来る時間は長くはあるまいと私は考えています。**私が敬愛してやまないノーム・チョムスキー博士も、最後の著作で「人類はもはや長くは存続出来ないだろう」と述べておられることに対して、私にも異論はなく、心苦しい日々を送っている今日この頃なのです。**

N) 今のウクライナの地における欧米とロシアの戦争により、一方では資源豊かなアメリカを除き、石炭火力に戻し、原子力発電を優先する先進資本主義国家があり、他方では貧しいので石炭火力などに頼らざるを得ない国々があるが、世界中が一体となって地球環境破壊に邁進し、人類の破滅に邁進している姿に、なすすべもなく呆然とした日々を過ごしている今日この頃なのです。